

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 飛ヶ谷 潤一郎

本研究は、ルネサンスの建築家たちが、設計において手本とした古代建築が、彼らの作品に、いかなる理由で、そしてどのように表現されているのかを考察することを目的としている。

当時の建築家が、古代建築を研究する方法は、ローマのように多くの遺構が残された街を訪れて実測調査に励むか、ウィトルウィウスの『建築十書』の読解に取り組むかのいずれかであった。しかしながら、彼らは必ずしもローマを訪れていたわけではなく、地元の中世建築を古代建築と誤解したり、ブルネレスキなどのルネサンス建築を手本とすることも少なくなかった。ましてや、地理的にも時間的にも遠く離れた古代ギリシアに関しては、人文主義的教養を備えた博学なアルベルティですら、正確な情報を得ていたとは考えられない。また、当時はまだ発見されていなかった古代エトルリアの遺跡に関しても、このことはおおむね当てはまり、結局は古代ローマ建築を参考にしていたのである。

一方、『建築十書』に関しては、中世の写本が各都市の宮廷などで保管されていたとはいえ、ラテン語で図版もないものが大半で、アルベルティなどを除いて、当時の建築家が自ら読んで理解することはまことに困難であった。その結果、例えばアルベルティは、『建築十書』に注解を施すよりは、自らの建築理論書を執筆するにいたった。15世紀後半のフィラレーテやフランチェスコ・ディ・ジョルジョによる著作は、古代建築に関する情報の正確さという点はさておき、イタリア語で多くの図版が掲載されているという点では、大きな進歩を遂げた。これらの書は、手稿であって、出版物ではないので、広範な影響力を及ぼすにはいたらなかったとはいえ、以後の建築書のスタイルを方向づける役割を果たしたと考えられる。

以下、各章の内容を手短に説明する。第1章は、上記の三原則のひとつの「強firmitas」について論じたものである。この語は、建築材料について論じた「第二書」に最も多く登場し、構造的な「強さ」という意味だけでなく、材料的な「強さ」に由来する「耐久性」という意味が多分に含まれているのであった。

第2章は、ウィトルウィウスの三原則が、アルベルティによってどのように解釈されたのか、代表作のパラッツォ・ルチェッライに注目して、この作品の史的位置づけの再考を試みたものである。

第3章は、ルネサンスにおけるエトルリア神殿の解釈の変遷を辿った試みである。アルベルティは、当時は何も知られていなかったエトルリア神殿を、マクセンティウスのバシリカと誤解して、マントヴァのサンタンドレア聖堂の設計における手本とした。すなわち、彼による異教の古代神殿の解釈は、同時代の聖堂に近いものであり、この解釈は、フラ・ジョコンドやチェザリアーノにも引き継がれた。とはいえ、16世紀半ばになると、遺構の発掘や実測調査が進み、『建築十書』の出版も改良を重ねられたと思われ、『バルバロ版ウィトルウィウス』の挿絵は、古代建築の姿にかなり近づいている。

第4章は、ブラマンテの絵画作品「プレヴェダーリの版画」を考察の対象としている。この版画に見られる建築は、ロマネスクやビザンティン様式の集中式平面の聖堂や、アルベルティのサンタンドレア聖堂を手本としているようである。さらに興味深い点は、彼の弟子のチェザリアーノが、『ウィトルウィウス注解』において、エトルリア神殿を含めた

古代神殿の復元図を描いていて、それらがこの版画から起こした平面図と実によく似ていることである。つまり、当時はまだローマを訪れていなかったブラマンテによる古代建築の解釈もチェザリアーノと同様に、地元の中世や同時代の建築と同一視していた可能性が十分に考えられる。そして、この版画は、後のローマでの作品、とりわけジェナッツァーノのニンフェウムへと展開していったと思われる。興味深い点は、このニンフェウムにはエトルリア神殿との共通点が見られ、版画作成の時点で、ブラマンテがエトルリア神殿を強く意識していたとも考えられるのである。

第5章は、オーダーの一種と見なされていたギリシア起源のアッティカ式について、ラファエッロの解釈を中心に論じたものである。この様式は、ウィトルウィウスの『建築十書』では、イオニア式柱礎や扉口とともに登場するものの、ルネサンスの建築家にとっては不可解であった。ラファエッロは、アッティカ式を含む5つのオーダーの確立者であるが、セルリオが定めたコンポジット式を含む5つのオーダーに取って代わられたのである。

第6章は、ラファエッロのヴィッラ・マダマに見られるフリーズはなぜふくらんでいるのかを考察し、そしてその影響が意外にも大きかったことを示したものである。このフリーズは、イオニア式オーダーとともに用いられており、彼が友人のファビオ・カルヴォが訳したウィトルウィウスの『建築十書』を、読み違えたことに起因している。しかし、ペルッツィ以後には、コリント式やコンポジット式にもふくらんだフリーズは見られるようになり、なかんずくパラディオは、この意匠を好み、建築作品や『建築四書』の図版に、頻繁に採用したのであった。

このように論証を展開する本研究は西洋建築史研究の成果として極めて有益なものであり、これら分野の発展に資するところが大きい。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。